

リ・モンスター
Re:Monster
金斬兇狐 Kanekiru Kōketsuno
2

目次

本編
7

番外編 月剣と黒の鬼（女騎士視点）
219

モンスター大図録（ゴブ爺&赤髪ショート監修）
263

ホブ星改めスベ星

ゴブ朗の仲間その4。
強力な魔術を駆使する
ハーフ・スベルロード ランクアップ
半魔導鬼に【存在進化】。

ホブリ改めブラリ

ゴブ朗の仲間その5。
血と剣を巧みに操る
ハーフ・ブラッディロード ランクアップ
半血剣鬼に【存在進化】。

女騎士

王国軍に所属する金髪
碧眼の美しき女性貴族。
魔剣【月の風】の使い手。

鈍鉄騎士

帝国軍に所属する
歴戦の騎士。
鈍鉄色の全身鎧が
トレードマーク。

父親エルフ

エルフの氏族を束ねるダンディー
なハイエルフ。
娘を助けてくれたゴブ朗に、
戦争への協力を依頼する。

娘エルフ

絶世の美貌を持つハイエルフ。
人間にさらわれそうになったところを
ゴブ朗に救われた。

ゴブ吉改めオガ吉

ゴブ朗の仲間その1。
【炎の亜神の加護】と【戦乱
の亜神の加護】を所持する
バリアント ランクアップ
オーガ・亜種に【存在進化】。

ゴブ美改めダム美

【氷原の神の加護】を
所持する美しき半吸血鬼・
ダムデビル
亜種に【存在進化】。

ゴブ江改めアス江

ゴブ朗の仲間その3。
地と雷を操る巨体の
ハーフ・アースロード ランクアップ
半地雷鬼に【存在進化】。

ゴブ朗改めオガ朗

ゴブリンに転生した主人公。
アブソープシオン
【吸喰能力】によって、
喰えば喰うほど強くなる。
オーグ
現在は小鬼・希少種に
ランクアップ
【存在進化】している。

《六十一日目》

今日は久々に親友ゴブ吉きちくんとはバディーを組み、森の未踏破区画にてハンティング。すると夕方頃、武装した十二名の人間を発見した。

人間達は日が落ちてきた森に溶け込むように暗色の迷彩柄の外套コウトを羽織り、周囲を警戒しつつ、それなりの速度——俺達からすれば遅すぎるのだが、比較するのは可哀そうだ——でエルフの集落があるらしい区画に進んでいる。おそらく、これから戦争するエルフの情報を集めるため人間軍を送り込んだ偵察部隊だろうと予測。

見て見ぬふりもできたのだが、ふと湧いた好奇心から、人間達を追跡する事に決めた。

二メートル五〇センチ以上の巨体を誇る【大鬼オウガ】が二体もいれば、追跡しようにも目立ち過ぎると思うかもしれないが、俺とゴブ吉君ならまず見つかることはない。

生後四日目から始まりを告げた、自分達の糧を得るためのハンティング。

あの日から今日まで、獲物を発見しても真正面から突っ込んでいく、などという事はせずに、隠れながら獲物の呼吸を読み取り、死角から強襲、という暗殺者^{まが}紛いの事を繰り返してきた。結果として、俺とゴブ吉くんの隠れ身技能^{ハイドリッススキル}は相当なレベルにまで磨かれた。オーガの巨体を隠蔽^{いんぺい}し、標的に悟られなくすることなど造作もない。

それに加えて俺は【隠れ身^{ハイドリッス}】をアビリティとしても所持しているので、ゴブ吉くんのサポートも軽くこなせる。問題などある筈も無い。

そんな訳で、人間達の背後から追跡する事しばし。

黙々と森を進んで行った人間達は、やがて一本の林道に到達した。エルフ達の往来によって踏み固められた為か、道々にエルフの足跡が見られる。

どうやらその林道が目的のポイントだったらしく、人間達は林道の左右を囲むように“U”の字に似た陣形を組み始めた。

陣形を構築すると、各々二つ所持していたクロスボウの内の一つを手に取り、もう一つをすぐ構えられるよう地面に置いて気配を消す。

呼吸は微^{かす}かで、身体も殆ど動いていない。まるで獲物を狩る直前の肉食獣のように、存在を悟られないよう身を伏せている。

あれなら、標的が相当近付いて来ても発見される事はないだろう。非常に高度なハイドリッス

キルである。まあ、野生で生きる俺達には劣るレベルではあるが。

ココまで態勢が整うと、クロスボウによる奇襲で、標的は沈黙させられる可能性が高い。クロスボウは二つあるので、立て続けに射てから接近戦に持ち込むはずだ。準備の段階でそうと分かるし、俺だったらそうする。

エルフ達は基本的に動きやすく軽い革の装備を好むので、金属鎧すら貫通できるクロスボウの一矢を防げるとは考え難^{むづか}い。

装備している革装備がマジックアイテムだったり、何かしらの魔法による備えがあれば別かもしれない。だがこれほど拠点近くで、まだ人間軍も本格的に森に侵攻してきていない現状、そこまでの備えをしているとは思えない。

人間達の作戦の目的は何なのだろうか。という訳で、俺は決して目視できない極細の糸を指先から密かに伸ばし、人間達が小声で交わしている会話を糸電話の要領で盗聴してみる事にした。

盗聴開始——盗聴完了。

それによると、とあるエルフの氏族長の愛娘を攫^{さら}う任務で此処にいるそうだ。ちなみにエルフの集落は幾つかの氏族から成り、それぞれの氏族長が集う会議【円卓会議】によって意思決定をするらしいのだが、件の氏族長はその会議の現議長のようなのだ。

普通ならそんな重要人物の家族がこの危険な時期に集落の外に出るなんて考えられない。だが、

どうやら愛娘は今日、【アールベール】と呼ばれるエルフ達の祭事に出かけていて、その帰りに、ココを通るらしい。

【アールベール】では、【精霊の泉】と呼ばれるエルフの聖地に、森に自生している希少な果実やエルフ達が造った宝剑などの供物を捧げる。更に選ばれし一人の女エルフ——そのエルフは【サーラの巫女】と呼ばれる——が伝統舞踊を踊って【神】に楽しんでもらう、という。

実際に【神】という存在があるこの世界において、この手の祭事はとても重要な意味合いを持ち、ごく稀に【神】から直接恩恵を与えられたりもする。それに、森の恵みを失わない為にも決して欠かすことができないものであり、その意味では俺達としても他人事ではない。

しかし今回はそのタイミングを、人間軍に狙われたようだ。

人間達の準備と会話からして、愛娘についている護衛と祭事官は皆殺しにされるだろう。

祭事からの帰りを血で染めるというのは【神】に対する冒瀆とも思えるのだが、その事を人間達がどう思っているかは分からないので一先ずは置いておく。

それよりも、この会話からエルフ達の中に裏切り者が存在する事も判明した。さすがに裏切った個人までは特定できないが、この情報が非常に重要であるのは間違いない。

まあ、誰だって滅びたくはない訳だし、仲間を裏切っても自分だけは、と考える輩が居ても珍しくない。利権とかが関わりともうボロボロ出てくるだろう———というか、そもそも俺には関係ない

のでもうでもいい。機会があれば、俺が稼がせてもらおう、程度の話ではあるが。

待ちくたびれたゴブ古くんには少々離れた場所でハンティングしていてもいい、事態に変化があったらイヤーカフスで知らせるようにして、俺はとりあえず成り行きを見守る。

事が起こったのは、それから更に二時間ほどが過ぎた頃だった。

長時間ジツと待ち続けた肉食獣の罠に、武装した美男美女ばかりなエルフの一団がゆつくりと近づいて来た。

攫う娘さんとやはらは、四人の男エルフに担がれた神輿の上に座す、伏し目がちで多少憂いを含んだ表情の【サーラの巫女】らしきエルフで間違いないだろう。見た目的には十代後半から二十代前半、中性的な顔立ちで、青みがかった銀髪が腰まで伸びている。傷一つ無い肌は処女雪のように白く、知性の光を宿した碧瞳は他者の心を奥底まで見通しそうなほど澄んでいた。半透明の素材を使った衣服は、背中や肩が露出しているものの、全体的に清楚で、【サーラの巫女】として踊り易い様なデザインだ。

儀式で舞踊をしたばかりだからか、薄らと汗の滲む肌は紅潮し、憂いがちな表情とは裏腹に、清らかかつ活発で健康的な雰囲気が漂う。

予想以上に美人だった娘さんの姿に少々見惚れてボンヤリと眺めていたら、隠れている人間達に、ごく僅かな変化が見受けられた。

これはもうすぐ事態が動くなと思い、イヤーカーフスを使ってゴブ吉くんを呼び寄せる。

その刹那に一齐に動いた人間達十二名。予め持っていたクロスボウで、一度に十二人のエルフを正確に撃ち殺した。姿を現わしてから一秒も経っていないその早業に、エルフ達は為す術なく倒れていく。

更に、人間達は足下に用意しておいたもう一つのクロスボウに持ち替えて、再び射撃。放たれた矢は、更に十二人のエルフを撃ち殺した。

突然の奇襲に取り乱しながらも弓を手に反撃しようとした残り八名のエルフだったが、今度はクロスボウを捨てて素早く駆け寄った人間達の刃に沈黙させられる。喉を短剣によって掻き斬られ、勢い良く鮮血を噴き出したエルフ達は一樣に苦悶の表情を浮かべながら死んでいった。

この間、僅か十秒程度だ。疾風迅雷、なかなかのお手並みと言えた。エルフ達の返り血は外套に弾かれ、人間達を染める事さえ無く地面を赤く濡らすのみだった。

その後、ただ一人生き残ったエルフの娘さんに近寄った男が、その口元に布を押し当てる。しばらくして、激しく抵抗していたエルフの娘さんの身体から力が抜けた。意識を失ったのが傍目からも窺える。

グツタリとした娘さんを担ぎ、無傷で任務を遂行した人間達はもと来た道を疾走する。迷いの無い撤退行動だ。

ちなみに、その道には俺が待ち受けていたりする。後ろから追跡していたので当然だが。

彼我の距離が十分近づき、頃合いだろう、というところで姿を現わしたと同時に、指先から黄金の糸を射出する。大量の強靱な黄金の糸が、人間達の視界全てを塗り潰す様に広がった。

それに加えて一応の保険として【地形操作能力^{アースコントロール}】を発動。十二人の人間達の逃げ場を完全に塞ぐよう、正面以外の三方に土壁を噴出させるのも忘れない。突然の事態に、慌てふためく人間達の表情が可笑しくて。

結果、一網打尽です。

コガネグモを喰って得たアビリティ【黄金系生成】によって生み出される俺の糸は、柔軟性などは以前のまま、かつ黄金なので見た目以上の重量がある。そのおかげで捕獲した者の体力を消耗させる効果と、炎に対してもある程度の耐性が付加された。そう簡単に断てるモノでは無い。

為す術無く黄金の糞虫^{金の糞虫}のようになった人間達が、地面に転がってウネウネとのたうつ様は滑稽だ。ただこのままでは奥歯に仕込んだ毒を飲まれたり、舌を噛み切られたりして定番のように自決してしまうかもしれない。まあ、例えそうなったとしても俺が治すので誰も死なせはしないが、治療するのが面倒なので糸の猿轡^{さるくつわ}を噛ませる。

更に拘束が解けない様に腕の関節を外し、親指と手首同士を嚴重に括り^{くく}つけたりしていたところ
で、ようやくゴブ吉くんが帰ってきた。

ゴブ吉くんの仕事は、人間十二名全員を担ぐことだ。

軽装備だとは言え成人男性十二人分なのだから結構な重量になるはずだが、ゴブ吉くんが持つと非常に軽そうに見えた……装備も合わせると、間違いなく一トン以上あるはずだけどなあ？ と小首を傾げるが、全然余裕そうなので何も言いません。

つい先ほど殉職なされた護衛エルフさん達の死体を見ると、クロスボウの一撃を受けたか、短剣で頸部を深く抉られたモノばかりだ。見事なお手並み、俺は怪我の治療はできてもまだ蘇生はできないので、急所を正確に破壊さればどうしようもない。

身に着けていた装備品全てと心臓を俺が貰って、死体がモンスターによって無残に喰い散らかされないようにしっかりと埋葬しました。

「能力名【^{アビリティ}幸運^{ラック}】のラーニング完了」

「能力名【^{ドレム}不運^{ミュー}】のラーニング完了」

すると良いアビリティと悪いアビリティの両方がラーニングできてしまった。

取りあえず【^{ラック}幸運】は常に発動させるとして、【^{ドレム}不運】はうっかり発動させないように気をつけねば。そして作業を終えた後に合掌、南無。彼等の冥福を祈る。



まだ眠っているエルフの娘さんは俺が抱いて、住処である拠点に帰還する事にした。

……ん？ 生け捕った十二人の人間達をどうするかだって？

そりゃ、尋問した後で皆の経験値稼ぎに貢献してもらうのさ。あと、効率的な拷問のやり方のレクチャーとかに使わせてもらいます。

捕まえたのは男ばかりだし、エルフみたいに容姿は良くない。なら、俺達の今後の為の練習台になってもらうのが一番いいのではないだろうか。

うん、今夜は大変そうだ。

《六十二日目》

捕まえた人間達から聞きだした情報によると、今日から二十日以内に人間軍による本格的な進撃が行われるらしい。

とは言え、ここはハインドベアーやトリプルホーンホースといったそれなりに強力なモンスターが生息する森の中なので、大人数を動員できるのは特定のルートだけだそう。

無論、そのルートも訊き出し済みだ。

彼らもプロなのだから普通ならこんな重要な情報を洩らしはしないだろうと思うかもしれないが、なに、四肢を削いで止血し、肉と骨を削いで治し、腹を切り開いては閉じ、仲間を目の前で無

残に喰って、などを繰り返してりゃ誰だって訊く事全てに答えてくれるモノである。

外道と言われるだろうが、それはもう間違いないと言われるだろうが、こんな事は歴史を紐解けば幾らでもあったことなので今更気にしない。そもそも、俺が持っている手法は先人達が培ってきたモノが大半なので悪しからず。

あと、今の俺、大鬼だし。人間じゃないのだからこの程度問題無し。という事で。

技術向上のためにあえて【隷属化】を使わずに聞きたい事を全て聞きだし、用済みになった後に、その肉を美味しく頂きました。

あとマジックアイテムなどの武装と、それなりにたくさんの経験値を頂きました。

「能力名【職業・秘密部隊】のラーニング完了」

「能力名【職業・首狩り処刑人】のラーニング完了」

「能力名【職業・隠者】のラーニング完了」

「能力名【状態看破】のラーニング完了」

「能力名【寄付】のラーニング完了」

「能力名【解錠】のラーニング完了」

「能力名【罨解除】のラーニング完了」

「能力名【セレストラップ罾感知】のラーニング完了」
「能力名【センス・エネミー敵性感知】のラーニング完了」
「能力名【暗殺補正】のラーニング完了」
「能力名【暗器熟達】のラーニング完了」
「能力名【対人戦能力上昇】のラーニング完了」
「能力名【ボイバルストライク首狩り】のラーニング完了」
「能力名【オーラスラッシュ気刃斬り】のラーニング完了」
「能力名【バック・アタック背撃】のラーニング完了」
「能力名【トリプルショット針通し】のラーニング完了」
「能力名【投擲】のラーニング完了」
「能力名【激痛耐性】のラーニング完了」
「能力名【魅了耐性】のラーニング完了」
「能力名【暗殺耐性】のラーニング完了」

とまあ、アビリティもかなりラーニングさせてもらった。

うん、【三連突き】だけだった物理直接攻撃系アビリティに【ボイバルストライク首狩り】と【オーラスラッシュ気刃斬り】などが加わっ

たのはありがたい。あと【解錠】とか【畏解除】とか、有用そうなアビリティを多数確保できたので満足です。

一日グッスリと薬で眠らされていたエルフの娘さんは、昼過ぎ辺りになってようやく目が覚めた。ちょうど俺がその綺麗な寝顔を覗き込んでいた所だったので、目が覚めた瞬間、背中から透き通る綺麗な青銀の翅はねを広げて跳ねあがる程驚かれた。

『私の護衛達を何処にやったのですか！』『私をどうするつもりですか！』『まさか、私の貞操を……ッ』とか色々騒がれたが、俺と錬金術師さん合作の薬草などから作成した鎮静作用のあるお茶モドキを飲ませ、一先ず落ちつかせた。

そうした後でようやく、淡々と成り行きを語って聞かせました。

娘さんと一緒に居た他のエルフは全員助からずに死亡したって事も、彼・彼女等の装備品と心臓を弔いの駄賃として貰う代わりに丁寧に埋葬してやったって事も、俺は敵が娘さん達を待ち構える準備段階からその様子を見ていたって事も、襲った人間は全て殺して喰ったって事も、全部である。昨夜の出来事に関して、一切の隠し事はしませんでした。

あ、ちなみに以前捕虜にしたエルフ達については話していない。だって今は全然関係ない事だしな。今回の事と関係があったら言っていたかもしれないが、無いのだから言う必要はない……という

事にしておく。

さて、当然と言えば当然だが、娘さんには激怒された。

感情にまかせたパンチが俺の胸筋を幾度となく叩く、が大した事はない。鎧は着ていないが、自前の分厚い胸筋はパンチの威力の殆どを吸収し、子供に小突かれているくらいにしか感じられない。ボカボカパンチ、とでも言うのか？ イメージとしてはアレに近いだろう。

娘さんがそんな行動をとるのは、高貴な身分としての相応な振る舞いってヤツがあるのだからどうかとも思うのだが、感情的には理解できない事も無いのでしばらくは自由に叩かせた。

微かな罵倒の言葉と悲しみの鳴咽は、次第に小さくなって止んだ。

その後コチラはデコピンを一発返す。俺が拳で殴ったら洒落にならん。デコピンでも手加減して威力を抑えた。じゃないと頭蓋が吹っ飛ぶだろう、きつと。

デコピンは大きく頭部が後退する程度だったが、非常に痛いらしく、赤くなった額を両手で押さえて涙目で恨めしそうに睨んでくる。

が、それは知らん。

取りあえず、『お前達エルフと人間が始めた諍いは俺達に関係ないのに、偽善とはいえ助けてやったのだから文句を言われる筋合いは無い』などなどテキトーな事を言い放つ。

あと、ついでに内通者が居るらしいぞ、とも言ってみた。そしたら娘さんは青い顔になって黙っ

てくれました。

突然の出来事に混乱し、成り行きを見ていた俺に怒り、同胞を失った事に悲しみ、更に説教され、内通者の存在を教えられて困惑した、というような複雑な流れ。こんな反応も仕方ないと言えば仕方ないのだろう。

しばらくして、色々な想いが噴き出したのか娘さんが本気で泣き出したので、一応慰めたりしましたが、いや、美人の本気な涙とか反則です。

その後、娘さんをエルフの里に送り届けるつもりだったのだが、会話が予想以上に長びいてしまい、時間も時間だったのでこの日も娘さんは泊る事に。まあ、一泊目は意識無かったけどな。

今夜も俺の糸製ハンモックでお休みです。

さて、明日はエルフの里である。一体どうなることやら。

あと、ゴブ爺よ。娘さんを奴隷にすんのか？ と期待した瞳で見てるんじゃない、煩わしい。別に敵じゃないのだから、俺としてはわざわざどうにかしようという存在ではないのだと二時間ほどじっくり話を……

《六十三日目》

普段通り目を覚まそうとすると、吐息がかかる程近くで俺を見下ろす気配を感じた。誰なのかを見極めるため、狸寝入りを決め込む。

【気配察知】で調べたところによると、どうやらエルフの娘さんである模様。とりあえず、何をしているんだと言いたくなった。

あと、ゴブ美ちゃんに赤髪ショートに鍛冶師さんに姉妹さんに錬金術師さんが物陰から遠巻きにコッチを窺^{うかが}っているのも、どういう事だろうか。

流石に何時までも狸寝入りはできないので、と言うかゴブ美ちゃん達の視線にある種の感情が込もってネットリと粘^{ねば}つき、微妙に背筋が寒くなってきたのでバツと瞬間的に瞼^{まぶた}を押し広げる。

そしたら娘さん、かなり慌てました。丁度昨日と逆の状況になった訳だ。

驚いた拍子にまた背中から透き通る青銀の翅^{はね}が広がり、あわあわと可愛らしく慌てる娘さんの動きが中々に面白く、思わず笑った。

すると顔を紅潮させた娘さんに頬を殴られた。

何故だ。全くダメーじはなかったたので問題は一切無いが。

その後、姉妹さん達が作ってくれた朝食を喰い終え、ゴブ吉くんと共に娘さんをエルフの里に送り届けるべく、拠^{しゅつ}点を出立した。ちなみに俺が訓練に交じらなくなったのと同じく、オーガになったゴブ吉くんはホブゴブリンでも容易く殺せるので訓練にあまり参加しなくなった。現在の訓練は部隊次席のホブゴブリンが担当している。

遭遇したコガネグモなどを適当に狩りつつ、エルフ達が造った林道や道なき道を三時間程歩き、ようやく到着。道中では打ち解けた娘さんから色んな情報——娘さんの青銀の翅^{はね}についてや、エルフの力関係など——を教えてもらったのでなかなか有意義だった。

到着すると同時に、俺達は茂みから飛び出したり樹の枝から降ってきたりしたエルフ達に囲まれました。

視界の中に入っている数はざっと二十五以上。そして【気配察知】によると、まだ隠れてコチラの際を窺っている者もいる。総数四十八名の部隊に囲まれたらしい。

どうも全員がミスラル製の鎧^{よろい}を持つ弓矢で俺とゴブ吉くんの急所を狙っているようではあるが、まあ、大した問題では無い。

この数と強さならアビリティの重複使用で十分殺し尽くせるし、そもそも俺とゴブ吉くんの肉体と装備は、ミスラルの鎧^{よろい}を持つ矢でも数十本程度までなら余裕で耐えられる。オーガの生命力を舐めないでもらいたい。

いや、剥き出しの頭部に何本も直撃を受ければさすがに危ないかもしれないが、至近距離で放たれても避ける自信がある。

といっても、こんな所でエルフ達と争うのは面倒でしかないし、傍には娘さんも居るのだ。

殺意と矢先を向けられて反射的に周囲のエルフを斧で斬殺しかけたゴブ吉くんを諫めるのと、娘さんが仲間達を諫めるのとはほぼ同時だった。

ちなみに斧や盾などは、十二種類の品々を最大二十個まで収納出来るという優れモノの腕輪型のマジックアイテムに収納しているので、必要な時に即座に引き出せる。

しばらく悶着があつたが、娘さんの命令を無視する事はできないようだ。妥協案として、護衛という名の監視役達によつて周囲を囲まれながら、俺達はエルフの里の中を進んでいった。

初めて足を踏み入れたエルフの里。なんていうか、エルフ達は巨大な樹と共に生活しているのだな、と一目で分かる構造だった。

エルフの里の中心には俺達の拠点付近では見た事も無いような、それこそ以前森で出会ったドライアドさんが宿っている大樹でさえ小さく見えるほどの巨大な一本の樹が生えていた。その周囲に生えた十数本の大樹に、階段などの足場や居住区となる場所が造られ、さらには吊り橋がかかけられ他の樹にも行き来出来るようになっていた。

つまりエルフ達の生活空間は基本的に地面では無く、樹の上であるらしい。

一応、地面には外敵を阻む逆茂木や環濠が造られ、大樹の根元には家畜小屋などもあるので、全てが全て樹の上での生活という訳ではないようだ。

里の造りを観察しつつ、物珍しそうというか見下した感があるというか、あまり居心地のよくないエルフ達の視線に晒されながら階段を上ったり下りたり、軋む吊り橋を渡ったりして案内される事しばし、ようやく目的地と思しき建物に到着した。

そこは周囲の家とは大ききさからして違う豪邸だった。立派な門の脇には二人の門番が控え、更に俺達を窺う視線が物陰のそこかしこから向けられてくる。

どうも娘さんの家がココらしい。出てきた使用人達に娘さんが温かく迎えられている。流石、氏族長の娘だけはある。

娘さんに促されるままに豪邸に入り、応接間らしき一室に通され、待っていた娘さんの父親と対面した。

父親エルフは白い口ひげがご立派な、引き締まった肉体を持つダンディーなおじ様エルフ、とても言えбайいのだろうか。威厳のある顔に慈愛に満ちた微笑みを浮かべて娘さんを抱きしめ、コチラに感謝の言葉を述べて頭を下げた。一つ一つの動作には、氏族を纏める長としての貫録が漂う。

そして背中からは娘さんが驚いた時に出していた青銀の翅が二対、展開されていた。

娘さんに聞いた情報では、青銀の翅は、エルフが【存在進化】した存在である【ハイエルフ】の

証拠だという。

ハイエルフは普段翅を体内に隠しているので普通のエルフとは見分けがつかないし、人前で見せる事はあまりない。娘さんはまだ未熟なので、驚いたりすると思わず出てしまうそうだが。

それをあえて見せているのは、威厳を示して交渉を有利に進める為か、純粹に娘を助けた俺達に對して自分の事を偽らずに接したいからか、あるいはその両方かなのだろう。

兎も角、父親エルフに勧められるままに椅子に座ろうとしたが、木造の椅子が嫌な音で軋んだので慎んで辞退し、俺達は床に胡坐をかいた。

使用人らしき女エルフが持ってきた紅茶は良い葉を使っているからか美味しく、お代わりを繰り返しつつ、簡単な世間話のような会話を交え、それから商談に移った。

こちらの要求を分かり易く纏めれば、貴方の大事な娘さんを助けたのだから相応の報酬をくれ、と言う事だ。

報酬の内容などは全て父親エルフに一任した。娘の価値を親に決めさせた訳だ。

こんなやり方は相手から嫌われるかもしれないが、父親エルフが冷静な判断を下せるのかどうか、こういった性格なのか、などを見極められれば、後々の交渉もしやすくなる。

これくらいは必要経費だ。まあ、ダメだったらダメだったでやり方は幾らでもある。

しかし予想外の事に、【遺物】級の【神迷遺産】が一つ、手に入る事になった。

報酬は弓の形状をしたマジックアイテムで、鑑定した所によると【必中の名弓】という名称らしい。これは普通の弓と違って矢を必要とせず、ただ弦を引き絞るだけで空気と魔力で編まれた矢が半物質化するようになっている。つまり、【必中の名弓】には矢切れが無い。

加えて放たれる矢は【必中】——射程距離圏内ならば、盾などで防がれない限りは狙ったポイントに、必ず当たるらしい。その他にも能力はあるが、ひとまず説明は置いて。

娘さんの驚嘆というか、驚愕というか、かなり大袈裟な反応からしてどうもこの弓、ココの家宝の一つであるらしい。だがしかし、愛娘の命には代えられないそうだ。親馬鹿である。おいおい、と思ったが得する立場なので何も言わない。親子のやり取りに生温かい視線を向けただけだ。

でも流石に家宝を貰ってしまった手前、このままハイさよなら、というのはちよつと気が引ける。だから、俺が持っている情報を与えてみた。父親エルフが個人的には嫌いでない性格だった事もある。それに、今後の戦争や近所付き合いを考えればお近付きになっておくのに丁度よかった。

あーそういう人間達はどこそこのルートでどのくらいの規模でうんぬん、あと何日以内であれやこれや、そういうこんなトラップの組み合わせは効果的で、こんな戦略とかどうだろうか、的な事を少しだけ漏らしてみたら、報酬を出すから先を続けてくれと言われた。

提示された報酬はミスラル製のチェインシャツ三十着、ミスラル製のショートソードが三十本、ミスラルの鉄塊が二十、それと生活に便利なマジックアイテム数点だ。

いやはや、情報の重要性を知っている人物で助かった。

俺が話す敵の内情やトラップ諸々の情報を父親エルフが紙に書き写すのをボンヤリ見ながら、アイテムボックスの中に入れていた水精石と土精石と風精石を各五つ、それから鍛冶師さんが製造した水・風・土の精霊石のナイフを各十本、取り出して机の上に置く。

あと、ついでに精霊の扱いに長けたエルフに適した【固有】^{ユニーク}級のスコップ型マジックアイテムを三つ程。

大きな恩も売っておこうかな、という思惑が多少無かった訳ではないが、以前返り討ちにしてやった精鋭エルフ達が抜けた穴をできるだけ埋めてやろうかなとも思ったのだ。

そうして俺達の商談は無事成立し、父親エルフと友好的な笑みを交わしながらガツチリと握手した。

ただ、その精鋭部隊の行方を知らないか？ と聞かれた時は、まさか俺達が飼っています、とも言えず、笑いながら知らんと言うしか無かったけどな。

帰り道、父親エルフから『コレはエルフが造った秘薬と名酒です。良かったら、どうぞ』という流れで、お土産まで貰いました。ちなみに酒は樽三つ分もある。

うん、これも幸運の御蔭かね？

酒は大変楽しみです。

父親エルフに、アンタなら格安で助太刀する、とだけ言ってから帰還した。

その夜。折角の酒なので、全員で飲む事にした。

エルフの酒ウマーーーーー!! と思わず叫んだ。

味わい深く、さっぱりとしていて、麻薬ではないが美味^{うまい}過ぎて中毒になりそうなほど。うん、また奢^{おご}ってもらおう。

父親エルフと仲良くする理由が、もう一つ増えた。

《六十四日目》

今日は非常に色々な事が起こったので、全てを詳細に語るのは面倒だ。

だから順を追って、無駄はできるだけ省いて語ろうと思う。

まず、ホブゴブリンが八ゴブ増えた。レベルが“100”になったゴブリンが【存在^{ランクアップ}進化】したのだ。しかもその内メイジ適性を持つのが二ゴブ、クレリックになったのが一ゴブもいた。

クレリックに成ったのは既にクレリックと成っていたゴブ治^じくんと親しかった個体で、恐らくそ

れに引つ張られたのだろう。思惑通りの結果にニヤリと黒く微笑んでみる。
その他にも進化した個体は多い。

ホブゴブリンだったゴブ美ちゃんは、今日目が覚めると【半吸血鬼・亜種】と呼ばれる種族になっていた。
その姿の変わりようは、ゴブリンからホブゴブリンになった時の比では無い。というか、比べるまでもない。

一八〇センチ以上はあるすらりと伸びた身長、掌からやや零れる大きさの胸に括れた腰という凹凸のハッキリした魅力的な体型、エルフよりも儼いまるで月のような美貌、ぷっくりとした唇、白銀に煌めく腰まで伸びた髪、きめ細かい肌、赤い瞳に黄金の瞳孔……などが特徴だ。

しかも本人によると【氷原の神の加護】を獲得したらしく、何も無い場所から大量の氷を発生・操作できるようになっていた。

【亜神】よりも一つ格上の存在である【神】の加護は、ゴブ吉くんのような【亜神】二柱の加護持ちよりさらに珍しく強力だ、とは普段通りゴブ爺談。

それにその華奢な見た目からは想像し難い程の膂力や俊敏性といった肉体面のステータスも、全て以前とは段違いだ。恐らく、素の状態の俺以上、ゴブ吉くんという勝負ではないだろうか。

しかも【亜種】であるが故に、神の力に守られ、日光に弱いという【吸血鬼】系種を含んだアンデッド族の特性は打ち消されているので弱点も無い。これまで通り、昼間でも何の制約も無しに外に出る事ができた。

つまり無駄な情報を省いて要約するとだ、ゴブ美ちゃんはすごい美人になりました。
それだけ理解できれば問題無しだろう。

ただ個人的に気になるのがその容姿で、俺が以前何処かで見た、いやよく知っている人物を数歳ほど大人にした顔のような気がするのだが……

それが誰だったのかは記憶に霧がかかってハッキリ思い浮かばないので一先ずこの話は置いておくとして、今日一日で変化した事柄をどんな述べていこう。

今日は本当に多くの事があり過ぎて大変だ。

今度はゴブ江ちゃんについて。

ゴブ江ちゃんが成った種族は【半地雷鬼】と呼ばれる【鬼人】系種族の一つだ。ちなみに亜種では無く、ノーマルである。

二メートル四〇センチ以上と俺に迫る長身で、筋肉質で骨太なガッチリとした体躯、やや尖った黄色い短髪、両側頭部から斜め上に湾曲しながら伸びる二〇センチほどの双角、柘榴石のような双

眸、やや黒みがかった土色の頑丈そうできて女性特有の柔らかい肌、西瓜のような大きさだが形の良い胸部、筋肉の形が見て取れる腹部、そして両肘に埋め込まれた直径五センチ程の二つの黄色い宝珠が特徴的な姿になっている。

宝珠はホブ星さんの額にもあったのと同じようなモノで、鬼人系種には必ず身体の何処かに埋まっている「鬼珠」と呼ばれるモノだそう。鬼人系種の本当の能力はこの「鬼珠」を解放することによって発揮される、らしい。

——この種族の能力は主に地形操作関係のモノで固まっているのだが、その中でも特に採掘に関するモノに特化しているようだ。岩盤の脆いポイントを見抜く【地質看破】をはじめ、ザクザクと岩盤を掘削して多くの鉱石を採掘するためか、肉表面を強化するモノも多くある。

試しに壁を掘ってもらうと、素手だと言うのにまるでドリルのようにザクザクと容易く掘り進めた。これには流石にちよつと引いた。

【固有】級マジックアイテムのピッケルを装備した時よりもサクサク掘るとか、どうなのよと思うとはいえ、掘削速度が飛躍的に上昇し、精霊石やその他の鉱石をこれまでにないほど速く、そして多く採掘できるので文句などあるはずもない。

あと若干ながら雷光系統魔術も操れるそうで、採掘時には鉱石探知などに活用しているのだとか。多様な金属を知覚できるのも、その能力があるからこそだ。

採掘技能をひたすら伸ばしてきたゴブ江ちゃんらしいと言うか、何と言うか。一度嵌った事に向かつて突き進むと、やがては色々と凄い事が起きるモノだ。趣味でもここまでくると、素晴らしいもんだ。

もちろん戦闘能力も馬鹿にできない。素手で岩をも砕くゴブ江ちゃんの一撃を、柔い生物がもらえばどうなるかなど想像するのは容易い。ミートペーストの様になるに決まっている。怖い怖い。

次はホブ星さんについて。

ホブ星さんは以前からソード系武器の扱いが上手だったからか、【鬼人】系種族の一つである【半血剣鬼】になった。

こちらもゴブ江ちゃんと同じく亜種では無くノーマルだ。加護は無い。

二メートル程度の身長、筋肉の形がハッキリと分かるが、細く女性らしい柔らかさを感じさせる体、少々慎ましい胸、額の中心から伸びる十五センチ程のルビーのような一本角、紅玉髓のような腫やや赤みを帯びた肌、血の色のような赤いロングヘアをポニーテールに縛り、チラチラとうなじが色っぽく見える。両手の甲には直径五センチ程度の紅色の「鬼珠」がそれぞれ一つずつ埋まっている。

新しく加わった能力に魔法関係のものは無いそうだが、以前と比べると肉表面が、つまりは近接

戦闘能力が飛躍的に上昇していた。

どうやら【血剣鬼】^{ブラッディロッド}系種は接近戦に秀でた種族のようだ。

それに“血剣”と種族名にあるように、自他の血液を条件付きで操れる異能を持っているそうなので、魔術が使えなくても相当強い。血が多く流れる戦場では、無類の強さを発揮するに違いない。近接戦闘能力だけで言えば俺とゴブ吉くんに次いで三番目か四番目には入るだろう。肉体能力面では種族的にゴブ吉くんやゴブ美ちゃんにやや負けてはいるようだが、接近戦で役に立つ【見切り】や【先読み】、【直感】^{インチュイション}などがあるのでいい勝負になると予測している。

それにしても不思議なのは、ホブ星さんの時のように、皆の身体の一部に必ず俺のと似ているが微妙に違う黒い刺青^{いれずみ}が刻まれていることだ。

ゴブ美ちゃんは背中に、ゴブ江ちゃんとホブ里さんは腕に、ホブゴブリン達は首だったり腕だったり足だったりバラバラではあるが。

まあ、何だかそこから力が湧く様な感じがするそうなので、今の所気にせずともいいのだろう。コレについての説明は今後に期待という事で。

ランクアップしたお祝いとして、ホブゴブリンにはそれぞれ二つずつマジックアイテムを渡した。ゴブ美ちゃんには蒼と白の魔鋼糸^{まこうし}に黒紫の魔骸布^{まがいふ}などで造られたドレスタイプのマジックアイテム

ム【不死妃^{ふしひ}の霞衣^{かすみい}】と、種族的特徴として獲得した【魅了^{めいりやう}の魔眼】をむやみやたらに使用しない為の【魔眼封じの眼鏡^{めがね}】、永久凍土から採取された魔氷結晶で造られた刀身を持つ、芸術品のようなクレイモア型の魔剣【月光^{げっこう}の雫^{しずく}】をプレゼント。

ゴブ江ちゃんにはその大きな体躯に適した大きさと種族的能力に見合った頑丈さを有する【大地母神^{ほじん}の戦鎧^{ウオービック}】と【大地母神の円匙^{シヨベル}】をセットで。大きさの関係で着れる服が無くなったそうなので灰色のツナギ型マジックアイテムを着替え分も含めて三つと、本人が汗を拭く何かが欲しいと言ったので、俺の糸を編んで更に強化エンチャントを施したタオルモドキを贈った。

ホブ里さんには対物理・対魔力を有する赤鉄製の全身鎧^{フルプレートアーマー}と赤いマント型のマジックアイテムをセットで渡し、それに加えて、吸血能力を持つ深紅のロングソード型の魔剣【鮮血皇女^{せんけりゅうじよ}】をプレゼントした。鬼珠^{オキジュ}を解放すれば実剣はあまり必要ないそうだが一応保険って事で。

ちなみにホブゴブリン以上の種族になった三名には、ゴブ吉くんとホブ星さんにも渡している腕輪型の収納能力があるマジックアイテムを基本装備として支給しています。

しかし、うむ。

ドレスを着た事によってどこぞの貴族令嬢のようになったゴブ美ちゃん、ツナギの前側のチャックを開放して、一応胸には灰色の胸帯——サラシのようなモノだ——を巻いて隠しているが臍^{へそ}とか鎖骨とか剥き出しのゴブ江ちゃん、全身赤に染まってどこか危険な雰囲気放つ鋼鉄の騎士となっ

立ち読みサンプル はここまで

ているホブリさんが並んでいる構図は、色々と凄いな。

自分でプレゼントしておいて何だが、それぞれがハマリ役である。

それにしても、ココまでランクアップしてもまだゴブ朗とかゴブ吉くんとか、以前のままの名前を使い続けるというのも違和感がある。だって既に『ゴブリン』じゃ無いし。ホブゴブリンでもないし。

そんな訳でゴブ爺に相談してみたら、こうなった。

俺ことゴブ朗↓オガ朗。

ゴブ吉くん↓オガ吉くん。

ゴブ美ちゃん↓ダム美ちゃん。

ゴブ江ちゃん↓アス江ちゃん。

ホブリ星さん↓スベ星さん。

ホブリさん↓ブラ里さん。

ゴブ治くん↓ホブリ治くん。

ゴブリ浮ちゃん↓ホブリ浮ちゃん。

エトセトラ……

ランクアップした個体はそれぞれ新しい名を授かりました。

